キレイなアサガオ

よっしゅん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平和な世界での、ある夫婦の物語

目　次

キレイなアサガオ　1
散歩　5
クレープ　10
娘　13
お花見　前　17
お花見　後　21
名前　27
夢　31
誕生日　36
遍く無償の無限の愛　40
昔の話　43
バニーバニー　47

キレイなアサガオ

何ともちっぽけな人間だったのだろう。
自分でも自覚できるほど、その人生は惨めで、何の価値も無いものだった。
生きるだけで精一杯だ……何て言い訳を常に振りかざし生きてきた。
その人生は全て自分が生きる為だけのもので、他者の為にした事など何一つ無かった。
感謝をされた事なんて一度も無かったし、むしろされた事と言えば罵られたりするぐらいのものだった。
当然だ、他者の為に何かをするという人間として当たり前の事を、自分という人間はしなかったのだ。
いや、するのが怖かったのかもしれない。
何故そんな人間になったのかは知らない。
生まれつきかもしれない、両親の愛情が全く注がれなかったからかもしれない、そうする事でしか生きていけないと、自分勝手な考えをしていたからかもしれない。
もしくは……愛というものが理解できなかったからだろうか。
何にせよ、自分という人間はそういう奴だった。
後悔はない……といったら嘘になる。
本当は他者に優しくしてあげたかった、愛を知りたかった。
けれど自分はそれを恐れた、臆病な人間だったから。
もし優しさを、愛を知ったら自分はどうなるのだろうか。
全く予想ができなかった故に、自分は恐れたのだ。
それに気が付けたのは、結局死ぬ寸前の時だった。
まるで映画のフィルムのように、自分の今までの人生がその一瞬で全て再生されたようだった。
その一瞬で、自分の人生がどれだけ無意味なものだったのかを知っ

た。
”嗚呼、つまらない人生だった”
そして嘆いた。
余りにも遅すぎる嘆きだったため、何もかもが手遅れだった。
結局死ぬ事でしか、自分の過ちに気付かなかった愚かな人間だった。
”――もし、もし次があるのなら、今度こそ”
愛を知ろう、情を知ろう、意味のある人生にしよう。
愚かな人間は、哀れにもそんな事を頭に浮かべながら、その無意味な人生に幕を下ろした。

そして、その次が訪れたのだ。
あまりにもそれは突然で、それでいて今度とないチャンスだった。
俗に言う生まれ変わりという奴だろうか。
気が付けば自分という人間は、全く違う人間になって再びこの世に生を受けていた。
しかし前世の記憶という奴は、殆ど無かった。
かつての自身の名前も覚えてない程に。
しかし、前世の自分は無価値な人間だった、次あるのなら今度こそ意味のある人生を歩みたい……それだけは自分という魂に深く刻まれていた。
だから聖人を目指した。
聖人というが、何も本物を目指しているわけではない。

単に、周りの人に優しくする事が出来たら良いな、それくらいのものだ。
しかし問題もあった。
新しい自分は、人一倍病弱だった。
生まれつきアルビノという奴で、その肌や髪は雪よりも白く、日光に暫く当たっているだけで火傷したかのように腫れ上がる。
加えて視力も右眼の方は殆ど無く、とても弱く傷つきやすい身体だった。
けれどそれくらいで止める気は無かった。
むしろこれは前世の罰、罪なのだと自分は考える。
だから弱々しく、触れただけで折れてしまいそうな身体で、自分はできる事をし続けた。
幸いというべきか、無理をせず細心の注意を払えば、死に至るまではしなかった。

『クラウディア・オルテンシア』
それが今の自分の名前だ。

「……クラウディア」
「……んむぅ」
声がした。
さっきまで夢か何かを再生していた頭が、その声によって再起動を

始めた。
「クラウディア、椅子に座りながら寝ていたら身体を痛めるぞ」
「……あなた？」
徐々に意識が鮮明になっていき、視力が無く眼帯をしている右眼を無視して、左眼だけを開ける。
すると自分の顔を覗き込む男が一人そこに居た。
「調子が悪いのか、ならばベッドまで運ぶとしよう」
「いえ、大丈夫よ。少し眠ってただけ。それに今日はいつもより調子が良いの、もう寝るだなんて勿体ないわ」
「そうか、無理はするなよ」
「……本当は無理をしている私を見たかったりする？」
男は答えず、フッと笑うだけだった。
「お帰りなさい綺礼さん」
「あぁ、ただいま」
そして何時もの挨拶を交わす。

男の名前は言峰綺礼。
長身で、神父服に身を包んだこの男は、私の夫だ。

散歩

まさか自分が結婚をするなんて、正直予想していなかった。
結婚というのは要するに、愛というものを分かりやすく表現する儀式のようなものだと解釈している。
そんな儀式を、自分が行う事は難しいと思っていたのだが……
「どうした、私の顔に何か付いているか？」
現にこうして、自分の夫は存在している。
そして自分はその妻だ。
生まれ持った病弱気質（ハンデ）があるため、こんな自分と結婚をしようとする男性は居ないと思っていた。
下手をしたら、いつ死ぬかも分からないような女だ。
加えて、調子が最高に悪い日だと他者の介護が必要になるくらいだ。
共にいるメリットは少なく、デメリットしかないような女と結婚する男がこの世に多い筈がない。
居たとしても、そう都合よく事が進むわけがない。
「ふむ、どうやら調子が良いというのは嘘のようだな。その証拠に口が動かせんようだ。どれ、動かすのを手伝ってやろう」
「ふぎゅ……ひはうふぁ、みひょれへはひゃけよ」
考え事をして呆けていた自分の頬を、夫は強すぎず弱すぎずの力加減で引っ張った。
地味に痛い、と表情で訴えている自分を夫は何処か楽しそうにしながら、暫く自分の頬を玩具にしていた。
「……満足した？」
「あぁ、お前は実に弄り甲斐がある」
ヒリヒリする頬をさすりながら夫にそう訊ねると、実に良い笑顔で夫はそう答えた。
ちなみにうちの夫は少し……いや、かなりの変わり者だ。

まぁこんな私を妻にするくらいなのだから、変わっていて当然なのだが……

何が変わっているのか一言で言うのならば、『他者の不幸』が大好物という歪んだ性格をしているのだ。

しかし自分はそれを否定しない。

世の中様々な人間がいるのだから、夫のような人間が一人くらい居ても良いのではないだろうか。

それに夫は悪人というわけではない。

例えば自分から何か事件を起こして、被害者の不幸を喜んだりするといった事は絶対にしない。

可愛く言ってしまえば、『気になる子にちょっかいを出して、嫌がるその子の反応を楽しむ男子小学生』のようなものだ。

夫も何が善で悪なのかは心得ている。

その上で夫は、周りに迷惑をかけない範囲で己の欲求を満たしている。

最近だと、休日に公園のベンチに座り、公園で遊んでいた子どもが転んで大泣きしているのを遠くから眺めて楽しんでいたらしい。

そして夫はよく、病状が悪化して自分が苦しんでいると、必ずその日はずっとそばにいてくれて、お世話をしてくれる。

多分というか、間違いなく苦しんでいる自分を見て楽しんでいるのだろう。

まぁそれ以上苦しめようとしたりはしないし、普通にお世話してくれるので全く文句はないどころか、自分からしたら嬉しいことだ。

言うなれば、需要と供給だ。

「ねぇ綺礼さん、折角はやく帰ってきたのだからお散歩でもしない？」

「別に構わないが……ふっ、そんな身体で自分から散歩に行こうなどと言い出すお前は本当におかしな人間だな」

「お互い様じゃない？」

確かにな、と夫は呟く。

そう、お互いどこかおかしいから、こうして夫婦で居られるのだろう。

「車椅子はいるか？」
「ううん、大丈夫よ」
「そうか」
　たまには自分の脚で歩くのも良い。
　それにこんな調子の良い日だけでも使っておかねば、いずれ脚が腐ってしまいそうだ。

「～～～♪」
　今日はどうした事だろうか。
　数年に一度あるかないかの、本当に調子が良い日だ。
　思わず鼻唄をしながら、日傘をクルクルと回してスキップしてしまう。
「あまり子どものようにはしゃぎ過ぎるな、転んでしまうぞ」
「そうしたら、綺礼さんがおぶってくれるのでしょう？　なら転んでも問題はないわ」
　とはいえ少しの怪我が、自分の場合は洒落にならない事に繋がる可能性があるので、充分に気を付けているつもりだが。
「……本当に風が気持ち良い。イタリアも良い所だけど、ニホンも充分に素敵な所ね」
「さて、それはどうかな」
「……綺礼さんはイタリアの方が良かった？」
「いや、クラウディア……お前と供にいるのなら何処でも私は構わん」
「あら、それは物凄く嬉しいわ」

気分が高まると、不思議と身体も調子を上げていく。
今なら五秒だけ全力疾走できそうだ。
「日本には慣れたか？」
「うーん……ニホンゴはまだ難しいけど、大体は慣れたわ」
数年前までは、イタリアにいた。
色々と訳があり、ニホンに住むことになったのだが、思っていたよりも住み心地が良い土地だった。
「ニホンは料理が美味しくて本当に良いわね、特にこの前食べた……お、オコノミヤキ？　あれ気に入っちゃったわ」
調味料を好みで好きな量かけられる上に、自分で焼くことができるオコノミヤキ。
楽しいし美味しいというまさに……イッセキニチョウ？　な食べ物だ。
「そうか、ではまた『三人』で食べに行くとしよう」
「えぇ、それが良いわ」
他にもオスシ、ウドン、ソバなどニホン特有の料理が沢山あって飽きない。
こんな小さな島国だというのに、母国よりも素敵に感じてしまうのは仕方ないことだ。
「あら、いつのまにか公園まで歩いてきたのね」
「そのようだな。喜べクラウディア、お前は自らの脚でここまで来れたのだ」
隣を並行する夫が祝福の言葉を投げかける。
確かに自分で歩いてここまで来れたのは今日が初めてだった。
「やったわ、今日はオセキハンね」
「あぁ、好きにするといい」
何故そこで苦笑するのだろうか。
何か祝い事があるときは、オセキハンというのを聞いたのだが……
「……ねぇ綺礼さん綺礼さん、あそこにあるのは何かしら？」
公園の景色を楽しみながら歩いていると、不思議なものを見つけた。

大きな車の横に、喫茶店などでよく見かけるカウンターが付いていて、そこに人が並んでいるのだ。
「……あぁ、あれはクレープ屋というものだ。甘い菓子のようなものだ……食べたいのか？」
甘い菓子と聞いた瞬間の自分の顔から読み取ったのか、夫はそう聞いてきた。
「……食べたいわ」
欲望には逆らえない。
ましてや食べた事のないものなら、尚更だ。
気が付けば夫の手を引いて、自分は駆け出していた。

クレープ

「……どうしてこんなに種類があるの？」
「私が知るわけないだろう」
クレープという食べ物はまさに未知の食べ物だった。
まさか種類だけでも軽く二十種類を超えるだなんて、誰が想像できただろうか。
「ええと……このイチゴの方が良いのかしら？　あぁでもバナナの方も……」
「お前がいくら悩もうが構わないが、背後を見るといい。お前のせいで待たされている人間が何人かいるぞ」
「え、あ、ご、ごめんなさい！　すぐに決めますから……！」
結局慌てた末に選んだのは、イチゴのクレープだ。
夫もクレープを一つだけ買ったらしいが、何の種類を選んだのかは教えてくれない。
二人で近場の空いているベンチを探す。
流石に立ちながら食べるのは慣れてないない。
それにいくら調子が良いとはいえ、そろそろ身体の方が悲鳴を上げ始めてきたので、何処かで座って休まないといけなかった。
「ふぅ……」
丁度よく二人ほど座れるベンチがあったので、そこにゆっくりと腰を下ろす。
そして溜め込んでいた疲れを、呼吸と共に外に吐き出した。
「疲れたか？」
「少しだけ、でもまだ大丈夫そうよ」
「お前の言う大丈夫という言葉は、既に口癖だという事に気が付いているか？」
「そ、そんな事ないわよ」

うん、多分そうだ。
夫からの視線を避けるように、早速買ったばかりのクレープを口に運んでみる。
「……思ってたほど甘くはないのね。けど美味しいわ」
「そうか、それは良かったな」
この公園でしか売っていないのが惜しいところだ。
せめて家の近くだったのなら、毎日買いに行ったというのに……
「ねぇ綺礼さん、最近噂の電動車椅子っていうの……何処で買えるのかしら？」
「なんだ、そんなものが欲しいのか？」
以前テレビで見かけた事があるのだが、何でも電気で動く車椅子が世の中にはあるらしい。
あれさえあれば、私の活動範囲は大幅に広がる事間違いなしだ。
「探せばすぐ見つかるだろう……しかし、そうか」
「？　どうしたの？」
夫はフッと笑って、意地悪そうな顔をして言ってきた。
「私は存外気に入っていたのだがな。クラウディア、お前の乗る車椅子を押しながら二人で出歩くのを」
「え」
思わずそんな声が出た。
「つまり、お前はもう私の手助けは不要ということか。ならば仕方あるまい、少し心残りもあるがすぐに手配しよう」
「え、あ、ちょっと、まって！」
そんなつもりで言ったわけではない。
「なんだ？」
「あぅ……えっと、やっぱりその、これからもいつも通りで良いかなって……」
「何故だ？　欲しかったのではないのか？」
「いや、だからその……」
「ん？　小さくて聞こえんな。もう少し大きな声を出してくれ」
うぐぐ……本当は分かってるくせに、分かってるくせにやっぱりう

ちの夫は意地悪な人だ。
「わ、私も！　あなたと出掛けるのが楽しいの！　だからいつも通りでいいの！」
思っていたよりも声が出た。
恥ずかしい気持ちをできるだけ紛らわそうとしたのか、夫の態度に怒りを覚えたのか、その両方か。
どれにせよ、夫の思惑通りに私は動いてしまったわけだ。
「そうか、ならばいつも通りにしよう」
ほら、予め用意していた台詞をさらりと言う夫は意地悪だ。
まんまと罠にハマってしまった恥ずかしさを忘れるため、残っていたクレープを口の中に押し込んだ。
「どうした、リスの真似事か？」
「うるひゃい！　ひれいひゃんのいひわる！」
あーもう……本当に恥ずかしい。

「そういえば綺礼さんは何味買ったの？」
「超激辛ベリーベリーソースクレープだ、食うか？」
「……いらないわ」
……辛いものは苦手だ、うん。

娘

ねぇ、男の子と女の子……どっちだと思う？
さぁ、私は別にどちらでも構わん。
もう、つまらない人ね。
それはすまないな。それよりも、お前が出産に耐えきれるのかを心配した方が良いのではないか？
……大丈夫、耐えてみせるわ。どんなに辛くても、私は耐えてみせる。
……そうか、うっかり忘れていたよ。無茶はお前の取り柄だったな。
ええ、昔から無茶をするのは好きなのよ私……
あぁ、知っているとも。
もう……じゃあ先に名前、考えておかない？
名前？
ええ、とっても素敵な名前を……実はもう一つ考えてあるの。
ほう、気が早いな。まだ妊娠したとわかったばかりではないか。
別にいいじゃない、早いに越したことはないわ。
そうか。
そうよ。それでね、折角だからあなたの故郷の言葉を使う事にしたんだけど……
私の？　あぁ、通りでここ数日、日本辞典を読み漁っていたわけか。
み、見てたの？　……えっとね、女の子だったらの話なんだけど、あなたの名前と同じような意味を持つ言葉にする事にしたわ。
ほう、是非聞かせて欲しいものだ。
笑ったりしないでね？　もし女の子だったら、名前は……

「あら、靴があるわね……もしかしてあの子帰ってきてるの？」
「なんだ、知らないのか？　アレの通ってる学校は今日午前終わりだ。特に予定もないのなら、帰ってきて当然だろう」
……そういえば昨日、そんな話をしたような。
いつもよりも長い散歩を終え、無事に家に帰ったのだが。
「なんだ、それなら少し待って、三人で散歩すれば良かったわね」
私の言葉に夫は、そうだなと返事をした。
そう、実は私と夫の間には子どもが一人いる。
そして居間からテレビの音が聞こえるということは、今『娘』はそこにいるということだ。
靴を乱暴かつ丁重に脱ぎ、小走りで居間に向かう。
そしているであろう娘の名前を私は呼んだ。
「『カレン』、お帰りなさい」
「それはこっちのセリフです。……ただいま、お母さん」
案の定そこには、既に部屋着に着替えてリラックスしている娘の姿があった。
カレン・オルテンシア。
それが娘の名前だ。
由来は至ってシンプル、夫が綺礼……言い換えると清潔という意味のキレイが日本語にあって、それに関連した名前を付けたかった。
だから『可憐』という名前を付けたのだ。
夫には苦笑されたが、私は良い名前だと確信している。
娘の容姿は私そっくりだ。
つまり娘もアルビノを引き継いで生まれてしまったのだが、幸いにも私よりは遥かに健康なので、普通に学校には通えるし、今のところ

介助も必要ない。
　私のように苦労しなくてよさそうなので、安心もするが同時に少しだけ羨ましくもある。
「買い物ですか？　私の好物の激辛チップスは買ってきてくれましたか？」
「ただの散歩よ、お父さんと一緒に」
　私がそう答えると、何故か娘は怪訝そうな顔をする。
「どうした、母さんには挨拶をするのに、父さんにはしてくれないのか？」
　すると夫がヌッと私の背後から現れ、部屋に入ってきた。
　そして夫の顔を見るなり、娘はあからさまに表情をムスッとさせて言った。
「黙りなさいこのダニ神父。身体が弱いお母さんを連れ回して何のつもりですか？」
「おや、相変わらず嫌われたものだ。しかしそれは誤解という奴だ、私が連れ回したのではなく、母さんが私を連れ回しただけだ」
　と、突然喧嘩ムードが始まる。
　しかし私は別に慌てたりしない。
　だって夫と娘のこれは、何時ものやり取りだからだ。
「ふん、何処までが本当なのやら。性根が腐っているあなたのことです、どうせ休みたがる母さんを無理させて歩かせたのでしょう」
「ただの言い掛かりだな。むしろ、私はお前の方こそ無理にでも歩かせた方が良いのではないかと思うぞ。運動もろくにしていないというのに、基本は家にこもってるお前のことだ……また増えたのではないか？」
「最低です、まさか実の父が娘にセクハラ発言するエロ神父だったとは。何故私がこんな神父の種からお母さんのお腹で育つ事になったのか不思議でなりません」
「か、カレン……家の中とはいえそういう発言はあまりしないでね」
　なんだか娘の私生活が心配になってくる。
　学校とかでもそんな調子だったりはしないと信じたいものだ。

「お母さんもお母さんです。散歩ならせめて私が帰ってきてから行けば良かったのです。今日は午前中に帰ると伝えていた筈ですが」
「そ、それは……その」
どうしよう、忘れてたなんて口が裂けても言えない。
「……まさか忘れていたと？」
「うっ……その、ごめんなさい」
しかし沈黙していても、すぐにバレてしまうのは明白。
あからさまに私を見る目が鋭くなった娘。
どうやら火に油を注いでしまったようだ。
「なに、あまり気にするな。コレは単に嫉妬しているだけだ」
すると夫の大きな手が私の小さな頭に優しく置かれた。
……嫉妬？
「例えるなら、好きな玩具を取られて拗ねた子どもだ……本当はお前と二人きりで散歩したかったのに、その役目を私に取られたと嫉妬しているだけだ」
夫がそう言うと、娘の身体が僅かに揺れ動いた。
「なにを馬鹿なことを、別に嫉妬なんてしていませんし」
と、若干早口気味で反論する娘だが、対して夫はそれがおかしいのか、クツクツと笑い出す。
「なにを急に笑っているのですか気持ち悪い」
「いや、すまないな。思っていたよりも動揺するものだからついな」
「別に動揺もしてません。ですから今すぐその不快な笑いをやめてください」
……なんというか、平和だ。
多分この夫と娘による戯れあいは当分続きそうなので、私は今のうちに家事の続きでもするとしよう。

お花見　前

続いてのニュースです。
今冬木市では、桜の木の下で行われるお花見がブームに――――
「……オハナミ？」
いつもの日課である家事を終え、休憩がてらテレビをつけて観ていると、そんな音声が耳に入ってきた。
ニホン語はまだ完全ではないため、聞き逃しや聞き間違いがあったかもしれないが、確かに今オハナミという単語が聞こえてきた。
「オハナミ……確か何処かで」
うーん、と頭の記憶の引き出しを開けては閉めてを繰り返して、該当するものを探していく。
確かニホンに来る前、ニホンの事を知ろうと読み耽った雑誌の中でそんな単語を見かけた気がするが……
「えっと、確かまだ部屋に……」
記憶が正しければ、その雑誌はまだある筈だ。
自分と夫の部屋の扉を静かに開け、本棚としばらくにらめっこをする。
そして目的のものが一番上の棚にある事に気が付いた。
「……届かない」
全く自慢にならないが、私の背はお世辞にも高いとは言えない。
なけなしの筋肉を使って、踵を上げ腕を伸ばすが、それでも届かない。
仕方なしに椅子を引っ張ってきて、踏み台にする。
そして目的のものを確かに掴み取り、椅子から降りた時には既に私の身体は悲鳴をあげ始めていた。
たった一冊の本を取るだけでこんなにも体力を消耗してしまう。
よく今まで生きられていたなと不思議なくらいだ。

まぁ、実際疲労で倒れた事なんて数えられないほどあるのだが。
しかしこの感覚にはもう慣れている。
なに、少し座って休めば問題はないだろう。
踏み台に使った椅子に腰を掛け、ペラペラと本をめくり出す。
「確かこの辺……あった」
目的のページにはしっかりと付箋があった。
流石過去の私、こういう興味がありそうなものにはマーキングをする癖があって良かった。
オハナミ……いわゆる花を眺める事を楽しむ、ニホン古来の風習らしい。
それにどんな意味が込められているのか、何の目的があるのかは残念ながら私には理解できない。
しかし、この本の文章や挿絵にあるように、『楽しい行事』という事だけは何となくわかる。
「……」
ふと、本の挿絵……おそらく家族を模して描かれているのだろう絵が不思議と目に焼き付いていく。
これはあくまで絵だ、だというのに私はその絵がひどく羨ましく感じた。
「……うん、最近調子が良いし、今がチャンスよね」
そうして私はある事を決意した。
さらに偶然か奇跡か、このタイミングで玄関の扉が開く音と、夫の声が耳に入ってきた。
「――――綺礼さん、綺礼さん！」
そして言うなら今このタイミングしかない。
「どうした、夫の帰宅に対する返事のひとつもせずに、犬のように興奮して」
さりげなく犬扱いをされるが、今はあえて無視する。
でなければ、タイミングを逃してしまうだろう。
「お花見！　しましょう！」
「……花見？」

「……それで、何故私まで巻き込まれなくてはならないのですか？」
「別に良いじゃない、家族みんなで楽しむのがお花見なのよ」
「なら母よ、貴女とゴミ神父二人で楽しめば良いじゃないですか。もしくは私と二人で」
「なんでカレンは頑なに三人で過ごすのを拒むの……？」
何故か最近のカレンは夫を理由もなく敵視する。
もしやこれが反抗期という奴だろうか？
昔は夫の肩車にキャッキャと喜び、もう一度やれと自分からせがむ程だったというのに。
ある日の日曜日。
今カレンと二人である公園に来ている。
そう、他でもないお花見をするために。
「……流石に休日ということもあって人が多いですね。地を這い回る蟻みたいです」
「もっと他に良い表現があると思うんだけど……それより他に見るべきものがあるわよ。ほら、綺麗な桜が満開よ」
きっとここにいる人達も私達のようにお花見を楽しみに来ているのだろう。
「どうせあと一ヶ月もしないうちに全て舞い散る運命です。花は散り際が美しいと言いますが、散った後は全く誰も関心を抱かないのは何故でしょうね。人間の愚かさがそれとなく分かる言葉です」
「カレン、お母さんはそんな哲学のような感想は求めてないわ。もっ

と普通に、綺麗だとか可愛いだとかそういうのを聞きたかったんだけど……」
流石というべきか。
カレンは容姿こそ私に似ているが、その中身はどちらかというと夫似だ。
……もしやカレンが夫に対して反抗期なのって、同族嫌悪的なものなのだろうか。
「それよりあの泥神父はどうしたのです？　今朝はあの男だけ先に出て行ったようですが、まさかバックれましたか？」
「あぁ、綺礼さんなら先に場所取りをしてくるって」
なんでも花見をするには、予め場所を確保しておかなければならないらしい。
確かにこれだけの人がいるのだから、早めに確保しておかなければ座る場所すら得られないだろう。
そんなわけで、夫は朝早くにレジャーシートを抱えて家を出たというわけだ。
「成る程、ではあの男は私達が到着した瞬間、用済みになるということですね」
「ならないわよ……」
せっかく朝から頑張ってお弁当も三人分作ってきたのだ。
無駄にはできないし、私とカレンだけでは間違いなく食べ切れない。
「さぁ、早く綺礼さんを見つけましょう。あの人は目立つから、きっとすぐに見つかるわ」

お花見　後

「あれ、カレンじゃないか」
娘に車椅子を押してもらいながら、一緒に夫を探していると、娘の名前を呼ぶ声が背後からした。
「……なぜあなたがここに？」
「なぜって言われてもな。単に花見をしに来たんだけど……カレンもそうなんだろ？」
「えぇ、不本意ではありますが……」
男の人の声だった。
まさかカレンに男の人の知り合いがいるとは正直驚きだ。
一体どんな人なのだろうか、確かめる為に上体と首を曲げて背後に振り向いた。
するとカレンの近くに、一人の青年がいた。
赤毛の少年で、身長はそれなりに高め。
まだ若干の幼さを感じさせるが、その顔つきは大人になりつつあった。
多分カレンよりも年上の少年だ。
「カレン、お知り合いの方？」
「……えぇ、一応は」
何だか煮え切らない返事だった。
まるで私には知られたくなかったような、そんな感じだ。
「……彼氏？」
「違います」
違うのか。
てっきり恥ずかしくて隠していたのかと思っていたのだが。
「……えっと、そちらの方はカレンの……お姉さん？」
「殺しますよ」

「なんでさ!?」
……お姉さんか。
この場合は若く見られて喜ぶべき所なのだろうか。
しかしそんなに童顔なのだろうか私は。
「……こちらは私の母です」
「え、は、母？　そうかそっちだったか……えーと、初めまして。俺は『衛宮士郎』っていいます。カレンとは一応顔見知りです」
エミヤシロウ……多分エミヤまでがファミリーネームだろう。
「じゃあシロウ君ね。私はクラウディアよ、娘がいつもお世話に……なってるのよね？」
「そんなわけありません。気を付けてくださいお母さん。この一見人畜無害に見えるこの男は筋金入りの女たらしです。朴念仁です、唐変木です。同級生の赤い悪魔と呼ばれる女からその妹、終いには自らの義理の妹までをその毒牙にかけ、攻略しようとする輩です。恐らく人妻も関係なくルート開拓しようとしますよこの男は」
「なんでさ」
何とも珍しい。
あの娘が形と内容はどうあれ、こうも他人に関して語るとは。
「ふふ、じゃあカレンも彼の毒牙にかかってるのかしら？」
「な、何をバカなことを……」
おや、満更でもない様子だ。
「シロウ君。見ての通り面倒くさい性格の娘だけど、どうか仲良くしてやってね」
「は、はぁ……俺なんかでよければ」
なんだかわからないがこの少年には好感が持てる。
……うーん、本当になんだろう。
何処と無く、夫と似てる……いや、正反対？
言葉に上手くできないが、彼も夫のように『何かを』持っている？
「それで衛宮士郎、何か用ですか？」
「え、いや用って程じゃない。親父と一緒に花見の場所取りを手分けして探してたらカレンを見かけたからさ。声を掛けただけだよ」

「ならとっとと消えなさい。私は忙しいのです」
「こら、カレン」
　両の腕を伸ばしてカレンの頬を挟む。
「折角お友達に声をかけてもらったのにその言い方はダメよ。しかも年上の方よ、ちゃんと敬意を払いなさい」
「……ふぎゅ」
「あー、いや気にしないでください。もう慣れっこなんで……それよりカレン、お母さんの車椅子を押すの代わろうか？」
「……あなたという男は本当におかしいですね。普通人助けするにしてもいきなり過ぎではありませんか？」
「なんでさ、人を助けたり手伝ったりするのに理由なんていらないだろ」
　……これはまた正義感がある少年だ。
　今の時代には珍しいと思う。
　そんな生き方をしているであろう彼が、ちょっと羨ましく感じた。
「ふふ、じゃあお言葉に甘えてお願いしようかしら」
「……まさか、本当に人妻ルートを？」
「だからなんでさ」
　彼の口癖なのだろうか。
　なんでさ、が多い。
　なんでさ……なんでさ。
　不思議と頭に残る言葉だ。
「ごめんなさいね。普段なら夫の役目だったり、調子が良ければ自分で歩けるのだけれども」
「気にしないでください。困った時はお互い様って言いますし……えーと、それでどこに向かえば？」
「とりあえずこのまま真っ直ぐお願い。夫を探してるのだけれど……こう、身長が高くて、もっさりとした髪型で、目が死んでるのが特徴なんだけど」
「……変だな、親父が一瞬頭に浮かんだ」
　ボソリと呟く少年。

「シロウ君もお花見に来たのでしょう？　ご家族の方とかしら？」
「えぇ。と言っても花見をしようと言い出したのは母や妹や家政婦……主に女性陣なんで、男の父と俺はこうして場所取りの役目を押し付けられまして」
「まぁ怖い」
まぁ、うちも似たような経緯なのだが。
「……見つけましたよ、シミ神父を」
するとカレンが夫を見つけたのか、そんな声をあげた。
「……あれは」
確かに、カレンの指差す方には見知った夫がいた。
しかし何やら様子が変だ。
というか……アレは一体何をしているのだろうか。
夫は何人かのギャラリーに囲まれながら、地面に敷かれたブルーシートの上に正座で座り、その前には……小さい台に置かれたヘルメットとハンマーを模した玩具だろうか？
そして台の向かい側には、男性が一人夫と同じように正座で座っている。
「え……親父？」
と、シロウ君が言う。
その視線の先には例の男性が。
つまりあの男性がシロウ君の父親なのだろうか……？
「すげぇなあの二人、俺こんな高度なジャンケン初めて見たよ」
「というか速すぎる。何か残像とか見えなかったか？」
耳を澄ませばそんなギャラリーの声が。
一体全体何をしているのか。
声をかけるべきか悩んでいると、二人に動きがあった。
「「叩いてかぶってジャンケンポン！」」
そんな掛け声と共に、両者はジャンケンをした。
夫がパーで、男性がチョキ。
男性は素早く台に置かれたハンマーの玩具に、夫はヘルメットに手を伸ばした。

「Time(固有時制御)alter(二重)double(加速)accel!」
「フッ！」
ピコンと。
男性の振り下ろしたハンマーが夫のかぶったヘルメットに当たる。
というか速い。
速すぎて互いに物を持った瞬間から今の状況まで何が起こったかよく見えなかった。
「……まさか、この速さにもついてくるとは」
「簡単な事だ。倍速で動くと分かったならば、そう弁えた上で間合いを見計らうだけのこと」
言っている意味は理解できないが、何やら高度な駆け引きがされているのかもしれない。
「えっと、綺礼さん……？」
「ん？　あぁお前か。少し待て、後一回こちらが勝てばこの戦いは終わる」
「えーと、親父？」
「ん？　あぁ士郎かい？　ちょっと待っててくれ、後一回このハンマーを奴の頭に叩きつけられればこちらの勝ちなんだ」
そうではなく、この状況を説明して欲しい。
そう伝えると、夫は簡潔に述べた。
何でも良い花見の席を見つけ、そこを場所取りしようとしたら丁度目の前の男とエンカウント。
あちらの狙いもこちらと同じだった為、どちらがこの花見の席を陣取るに相応しいか決める為勝負をする事にしたらしい。
……ちょうど他の花見客が持っていた小道具を使って。
「では次で終わらせるとしよう、衛宮切嗣とやら」
「言峰綺礼……どうやらそちらにも引けない事情があるみたいだが、それは僕も同じだ。次で決める……！」

「それでキリツグったらね、まるで子どものようにはしゃいじゃって、もう可愛かったわ」
「ふふ、アイリさんが羨ましい。うちの夫は私にぜーんぜんそういう姿見せてくれないんだもの」
――――結局男二人の戦いはいつまでも続いた。
なので議論の末、『衛宮家と言峰家が一緒に花見をすれば良い』という結論が出た。
ちなみに、未だに勝負を続けている男二人はもう気がすむまでほっとくことにした。
やはり花見をしに来て正解だった。
こうして気が合いそうなママ友（アイリさん）も増えたことだし、娘もシロウ君とその妹さんと楽しそうに桜の木の下で戯れている。
……夫も、まぁ楽しんでいるのかもしれない、多分。

名前

「き、キレェ？」
「綺礼」
「キレー？」
「……難しいなら無理して呼ばなくてもいい」
「そ、そんな事ないです！　確かに難しいけど、少しコツを掴んできて……きれぇい！」
「……」
「……うぅ」
――人生初めての夫の名前は、私にとっては発音が難しかった。
何回か練習したが、どうにも上手くいかない。
「……なぜそこまで名前にこだわる？」
「え、だって……夫婦ってそういうものなのでしょう？」
夫婦に限った話ではないが、相手の名前を呼ぶのは色んな意味が込められている。
親愛や友情、慈愛に敬愛。
そこには人として、相手を思いやる気持ちが込められている。
だから可能な限り私は、人の名前を呼び続けていたい。
「それに、ずるいです。貴方は私の名前をハッキリ言えるのに、私だけ下手くそなんて認められないです」
「その考えは私にはよく分からんが……クラウディア」
夫は私の名前を唐突に呼んだ。
見せつけだろうか、きっとそうなのだろう。
「……ところで、きれぇの名前って何か意味があるのですか？」
「……清く美しくあれ、と父が名付けた」
「まぁ、素敵ですね」
「……果たしてそうかな」

「カレン」
「……」
「カレン」
「……いきなりなんですか。正直貴方に名前を呼ばれても虫酸がはしるだけです」
「なに、たまには名前で呼んでやれと言われただけだ。それより、お前もたまには私の事を『お父さん』と呼んでみてはどうだ？」
「は？　本当に気色悪いですね。呼ぶわけないでしょう」
　なんてやり取りが、居間から聞こえてくる。
「ふむ、記憶違いでなければ数年前までは『お父さん』と呼ばれていたはずだが？」
「可哀想に、もう頭がボケてきたんですね。そんなの記憶違いです、あり得ないです」
「……そうか。では確かめてみるとしよう」
「……何ですかその手に持った物体は？」
「ビデオカメラだ」
　少し気になって様子を伺いに覗きに来たら、夫はその手にそこそこ昔に購入したビデオカメラのスイッチを入れていた。
『お父さん、抱っこ』
「ッ……!?」
　そしてまぎれもない、カレンの声がビデオカメラからした。
『お父さん、抱っこ』
「ち、ちょっと待ってください。何でそんなものが残って……！」
『お父さん、抱っこ』
「や、やめなさい！　リピート再生しないでください！　そして今すぐそれを寄越しなさい塵神父！」

夫は器用に片手でビデオカメラを持ち上げ、何度も何度も同じ所を再生し続けている。
そしてそれを奪い取ろうと飛んだり跳ねたりする娘。
あ、今凄く良い笑顔だ綺礼さん。
その微笑ましい争いは、三十分くらい続いた。

「クラウディア」
「……急にどうしたの？」
ぽけーっとしていたら、いきなり娘に名前で呼ばれた。
「いえ、お母さんの名前ってあまり耳にしないので、なんとなくです」
「……そうなの？」
言われてみればそうかもしれないが……
夫も基本は名前呼びする事は少ないし。
「ところで知ってましたか？　クラウディアというのは一般的にはお母さんのようにヨーロッパ系の女性の名前として使われていますが、その由来は古代ローマのクラウディウス氏族からきてるそうですよ」
「クラウディウス……うーん、どっかで聞いたような」
なんだったけか。
テレビとか本とかで見かけたような記憶が……
「有名なのだとローマ帝国第五代皇帝とかですかね。暴君とかいわれた」
「あぁー！　確か『ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクス』だっけ？」
「……お母さんってそういうあまり役に立ちそうで立たない知識ばかり覚えてますよね」
「まぁ、ベッドの上でできる暇つぶしっていったら限られてくるもの」

昔はそういった理由もあって本ばかり読んでいた。
歴史書とかもそこそこ読んでいたため、そのような知識も頭に入ってたりする。
「凄いわよね昔の人って。こんな遥か先の時代にまで名前が語り継がれるだなんて。ネロ皇帝は暴君とか言われてるけど、実際どんな人だったのかしらね？」
「もしかしたら、実は男装していた女性……とかあり得るかもですよ」
「カレンは面白い事言うのね。もし本当だったら、学者さん達が驚きのあまりひっくり返っちゃいそうね」
そんなこんなで、夕方まで娘とトークを楽しんだ。

夢

母が好きだ。
母がどうしようもなく、好きだ。
真っ白な肌も、髪も、片方しかない瞳も、骨と皮しかない身体も、その在り方も生き様も、全て好きだ。
いつ散ってもおかしくないその命で、健気に生きて、懸命に愛を与える母が好きで好きで仕方ない。
『カレン』
母に名前を呼ばれるのが好きだ。
触れれば簡単に壊れそうなか弱い声で、精一杯張り上げるその声が好きだ。
『重くなったわね……もうお母さんは持てないかも』
母に抱っこされるのが好きだ。
残念ながらそれはもう叶わぬ願いだが、好きだった。
『怖い夢でも見たの？　ならお母さんが一緒に寝てあげる』
母と寝るのが好きだ。
その頼りない腕で抱き締めてくれる感覚が、好きだった。

母は弱くて、強い人間だった。
どんなに苦しい目にあっても、どんなに痛い思いをしても、母は母であり続けた。
ベッドで何日も寝たきりかと思えば、子どものように外ではしゃぐ時もある。
いつだって笑顔を忘れず、それでいて悲しい時は涙を流す。
そんな母が誰よりも人間らしいと私は思った。
ある日、ふと思った事を母に聞いてみた。

『どうして私を産んだのか』と。
お世辞にも母の身体が出産に耐えきれられるものだとは思えない。
実際、私を無事に産めたのも奇跡に近かったらしい。
しかし、奇跡とはいえ母はその時命を落としかけたとも聞いた。
何故、そこまでして産もうと考えたのか。
気付いていなかったわけではない筈だ。
仮に望まない妊娠だったのなら、その時点で諦めれば済む話だ。
では何故なのか、当然の疑問だった。
そして母は、少し照れくさそうに答えた。
『愛したかったから』
ただそれだけの、一言だった。
それなのに私はそれ以上、何かを言う事はできなかった。
それが嬉しさからくるものだったのか、理解できない故の諦めだったのかは未だにわからない。

母は不幸な人間だ。
その生まれも、人生も決して楽なものではなかった。
しかし母はそんな不運を怨みはせず、それを誤魔化すようにいつも笑っていた。
何故だ。
何故母はあんなにも健気に、精一杯生きているのに、こんなにも不幸なのだろうか。
どうして母が苦しまなくてはいけないのか。
わからない、それだけがどうしてもわからない。
どうして、どうして――――

どうして、母が『死ななくてはならない』？
その疑問が、ずっと頭に残る。
冷たい雨の感触を全身に味わいながら、目の前にある母の名が刻まれた墓石を見ていると、その疑問がぐるぐると回る。
これはわかっていたことだ。
覚悟ができていたはずだ。
極端に言うと、母はいつ死んでもおかしくない人間だった。
だから別れは突然来るだろうと、わかっていた。
だというのに、何故今更こんな疑問が私を苦しめるのだろう。
何故、何故と。
あれだけ頑張った母が、苦労に見合うだけのモノを得たとは思えない。
母はもっと幸せになるべきだった。
今からでも遅くなかった。
母のこれまでの人生が不幸だったなら、これから幸せにしていけば良いと。
そう思っていた、そう願っていた。
もしこの世に本物の『聖杯（願望器）』があったとしたなら、それが自らの手にあったのなら。
それに縋りたいと思うほど、私は母を幸せにしてあげたかった。
『風邪をひくぞ』
耳障りな声が背後からした。
この男は変わらない。
母が死んでも変わる事はない。
母があれだけ尽くしたというのに、この男は最後まで変わる事はないのかもしれない。
そう思うと、無性に腹が立つ。

『そこに突っ立っていても、何も変わらないぞ』
五月蝿い。
『いくら待っても、生き返りはしない』
五月蝿い、五月蝿い。
煩わしい。
その鬱陶しい声を止めろ。
『お前の母親はもういない』
止めろ、止めろ、止めろ！

――目覚ましの音が響いた。
それをいつものように、手慣れた手つきで止めた。
まだ呆けている頭で、何故こんなにも寝汗がひどいのか、この何とも言えない不快感は何なのかを考えた。
そしてすぐにわかった。
私は悪夢を見ていたのだと。
そう理解するや否や、ベッドから飛び起き、部屋の扉を乱暴に開け部屋を出た。
二階から一階へと降りる階段を一気に駆け下り、私は居間へと飛び込んだ。
「――――おはようカレン。今日は朝から元気みたいね」
母がそこにいた。
いつものように、笑顔の母が。
「あら、どうしたの？　怖い夢でも見た？」

そして母の細い身体に抱きついた。
抱き心地としては正直微妙だが、私はこの感触が好きだ。
いつまでも、いつまでもこの感触を味わっていたい。
そしていつまでも、私にとってのこの『幸せ』が続きますように。
母の幸せがおとずれますように――――

誕生日

あ、これはダメだ。
朝目覚めて、すぐにそう思った。
「――あぅ」
身体が上手く動かない。
思考も上手く働かない。
まるでサウナの中にいるような全身の蒸し暑さが、非常に不快に感じた。
これは要するにあれだ。
体調を崩したというやつだ。
俗に言う風邪を引いた、とも言うのだろう。
この感覚は幾度となく味わってきたので、すぐに結論が出せた。
しかし病弱な自分にとって、ただの風邪でも相当な苦痛になる。
「――き、れい、さん」
枯れ果て、か細い声で夫の名前を何回か呼んだ。
時計を見れば朝の6時前、娘は学校の部活の朝練で居ないが、まだ夫は家にいるはずだ。
程なくして、声に気が付いた夫が部屋に入ってきた。
「――呼んだか？」
私の様子を見て、何処と無く嬉しそうな様子だった。
「そこの、薬――」
「あぁ、わかっているとも。今回はどれほどのものだ？　医師も呼ぶか？」
「だい、じょうぶ。たぶん、ただの風邪」
「そんな死に掛けの顔でよくも『大丈夫』などと言えたものだ」
綺礼さんの介助を受けながら、薬を飲み、汗で汚れた体を拭いてもらい、着替えを済ませる。

「ありが、とう。きれいさん」
「気にするな。だが暫くはベッド生活だ、無理をしては本当に死ぬぞ？」
「……でも、そっちの方が綺礼さんは『嬉しい』んでしょう？」
「フッ――――」
夫は軽く笑うだけだった。
「それより、ここ数日夜更かしをしていたようだが？」
「――な、なんのことかしら」
「まぁ、認めないというのなら別に構わない。だが、自分から体調を崩す要因を作っておいて、その後始末を他人にやらせている現状をどう捉えているのかが気になっただけだ」
「うぐぅ……」
確かに、確かにその通りだ。
今回の体調不良の原因は、最近睡眠時間を削っている事が関係しているのかもしれない。
「……」
ジッ、と夫は穴でも開いてしまうと思うくらい私を見つめている。
多分、私の言い訳を待っているのだろう。
「――そ、その……」
その視線が妙に気恥ずかしく感じさせ、私の口は勝手に動き出した。
「……た、誕生日が――――」
「――誕生日？」
「きれいさんの、誕生日が近いから……素敵なプレゼントをって。でも何を送れば良いか悩んで……その、夜更かししました」
まるで親に悪戯がバレて怒られている子どものようだ。
当日まで秘密にしたくて、サプライズをしたくて、本人に悟らせないよう夜中にこっそり本だったりなんだったりを見ながら、悩んでいた。
だというのに、まさかこのタイミングで暴露する羽目になるとは……

「うぅ……そんな目で見ないできれいさん」
恥ずかしい。
ここ数年で一番恥ずかしい。
「……お前という女は本当に――――」
「え、何か言った？」
「――――いや、何も。そういう事なら聞かなかった事にするとしよう」
夫はそう言って、部屋を後にした。
「……きれいさん？」
そのときの夫の後ろ姿が、やけに印象的だった――――

男にとって、己の妻として選んだ女は聖人だった。
初めて会った時からそう思わせるほど、一体何が女をそうあれと突き動かしているのか、男には理解できなかった。
男は歪んでいた。
そして女もまた、歪んでいるのであろう。
女は男の歪みを受け入れた。
男もその女の歪みを受け入れた。
正直に言って、男と女の在り方が正反対なものでありながら、互いに受け入れる事が出来たというのは奇跡に近いのかもしれない。
実際男は一度全てを諦めた。
しかし女の存在が、男をこの世に踏み止まらせた。
「何を言い出すかと思えば……誕生日とはな」
男は笑った。
男は女を愛する事は未だに出来ていないというのに、女は必死に男を愛そうとしている。
それが何故だか、男に快を感じさせる。
「お前を選んで正解だったのかもしれんな――――クラウディア」
男は女の名を口にした。

結局夫へのプレゼントは無難に、手編みのマフラーにした。
そろそろ冬が近いので、あった方が良いかなと思った。
「他に欲しいものとかないかしら？」
「そうだな……では偶には外食でもするとしよう」
「――――まさかとは思うけど、その外食先はこの世全ての辛味を提供するあのお店だったりする？」
「あぁ、泰山だ。そして喜ばしい事に、先日から家族サイズの麻婆豆腐というものがメニューに加わっていた」
「――――ねぇ綺礼さん。私辛いのは……」
「お前にも是非味わって欲しい。カレンも母親と同じ食事を食せると知ったら喜ぶだろう」
「……食べます」

遍く無償の無限の愛

「お母さん、私ロックスターになります」
「え、え？　ろっくすたー？　急にどうしたのカレン……？」
　朝起きたら、可愛い娘が何かおかしかった。
「えっと……というか、何か背が伸びてないかしら……成長期？」
「何を言っているのですかお母さん。私はもう立派な大人。見ての通りお母さんの美しさを遺伝子として受け継ぎつつ、見事なナイスバディになれました。これも全部お母さんのお陰ですね」
「容姿が私に似ているのは認めるけど、プロポーションの方は綺礼さんの遺伝子じゃないかしら……」
　明らかに何かがおかしい。
　だってカレンはまだ十五歳だった筈だ。
　だというのに目の前の娘は、どう見てもシロウ君くらいの歳だった。
「それと……その格好はどうしたの？　随分と高そうな服だけど……」
　カレンはいつものお気に入りの私服や学校の制服ではなく、赤色を基調とした可愛らしい服装だった。
　それにしても私の娘、ベレー帽がよく似合う。
「これは所謂、新デザインというやつですね。きっと霊基再臨するとまた違った服装になると思いますよ」
「れいきさいりん……？」
「あと、宝具を使っても変わります。見せてあげましょうか？」
「ほ、ほうぐ……？　ごめんなさい、お母さん理解が追いつかないわカレン」
「ではいきます――『遍く無償の無限の愛《ザ・グレイテストヒッツ・コーデリング・アガペー》』！」

「カレン!?」
娘が急に呪文のような言葉を口にしたかと思うと、娘が突然発光をし始めた。
眩しい。
「聖なるかな、聖なるかな……あぁ、ハッピーバレンタインです。お母さん」
「えっと……ハッピーバレンタイン?」
光が収まると、そこには神秘的な格好に早変わりした巨大な娘が居た。
もう、訳が分からない。
私の娘は一体どうしたと言うのだろうか……

「――お母さん? 寝るならちゃんとベッドに行ってください」
「……あれ、カレン?」
――目が覚めたら、そこには見慣れた娘がいた。
……さっきのは夢、だったのだろうか?
「? 私の顔に何か?」
「……カレン、ろっくすたーになりたいの?」
「は……?」
娘は素っ頓狂な反応をした。
「急にどうしました? 体調でも悪いのですか?」
「あと新しいベレー帽買いましょうか。赤色の、きっと似合うわ」
「それは嬉しいですけど……もしかして寝ぼけてるのですか?」
「ふふ……巨人になっても貴女は可愛いわ……」
「あの、本当に大丈夫ですか? 主に頭の方が……」
私の娘はどんな姿になろうが、どこに居ようがきっと可愛い。
案外保健室の先生とかも似合うのではないだろうか。

白い白衣がよく合いそうだ……

「ふふ、産まれてきてくれてありがとう。私のカレン……」

「……それは、こちらの台詞です」

昔の話

「――私には、お前を愛せなかった」
男が女にそう告げた。
「……そうですか。でも、私は貴方を愛せました」
女が男にそう返す。
「二年くらいでしょうか？　私には、貴方を愛するのに充分な時間でした」
「だが、私はその時間の中で何も変わらなかった。お前も、お前が命を賭してまで産み落とした子も、私には愛せなかった」
「今まで一度も？」
「……あぁ、愛せなかった」
男は女の視線から逃れるように、目を閉じた。
「――それは、残念です」
「……あぁ、残念だ」
この時男が感じていたのは何だったのだろうか。
失望、後悔、無念。
全部感じていたのかもしれないし、全く感じてなかったのかもしれない。
男は、それすらも分からなかった。
「……何処に行くのですか？」
男は女のもとから離れようと、足を踏み出した。
二歩目で女がそれに気付き、男に問いた。
「――私は産まれるべきではなかった。ならば、生きている意味も意義もない」
「私を置いてゆくのですか？」
「そうだ、この為にお前を選んだ。いつ命を終えてもおかしくないお前を」

「……酷いお人、どうして私を選んだのか教えてくれなかったのに、今更――しかもそんなにアッサリと答えてくれるだなんて」
「あぁ、その通りだ。私は酷い人間だ、欠落した人間だ、欠陥した人間だ。ならば己の誕生は何かの間違いだ」
「……それなら、どうして此処にきてくれたのですか？　別れなんて告げる必要が貴方には無いでしょう？」
　男は未だに視線を逸らしたまま答える。
「単なる義務だ――私の目的、試みの為にお前を選んだ。その試みを終えるのなら、それを告げるのは私の義務だ」
「――ふふ、本当に真面目なお人」
　女はそう言って、ナイトテーブルに置かれた果物ナイフを手に取った。
「――いいえ、貴方は私を愛してます」
　女は男の言葉を、考えを否定した。
「何を――」
　男の言葉よりも先に、女の手が動く。
　女は手にしたナイフを、己の胸に突き立てようと腕を振り下ろして――

「――ほら、貴方、泣いているもの」
「……？」
　――それは男の手によって止められた。
　男は無意識に、女の自殺を止めてしまった。
　ナイフの柄を握る女の手ごと握るように、男は柄を掴んでいた。
「……私はいったい――」
「貴方、泣いてるのよ」
　男は涙など流していない。
　だが、女にはそう見えたのだ。

「……泣いてなどいない。悲しんでなどいない。私は――――」
「『どうせ死ぬのなら、自分で手を下したい』――――ですか？」
「っ……」
女は男を愛していた。
故に、女は男の欠陥にはもう気が付いていた。
男が他者の不幸を糧にする事でしか、幸福を得られない人間である事に。
「……良いですよ」
「なに……？」
「貴方が私を愛しているという証明になるのなら、どうぞこの命を絶ってください」
女はナイフを握っていた微かな力を完全に抜いてしまった。
元より、男の握力を振り解く事が出来ないのだから、女にこの状況を覆す事は出来ない。
男がこのままナイフを取り上げれば、女は助かる。
逆にこのままナイフを押し込めば、女の命を終わらせる事ができる。
女の生死は、男の手に委ねられてしまった。
「私は知っています。貴方の苦しみを、悩みを、嘆きを。そして喜びを、歓喜を、幸福も――――だから、私を選んでくれたのでしょう？」
「……」
「病に苦しむ私を、生死を彷徨う私を、未来がいつ途絶えるか分からない私を――――そんな私を、貴方は愛してくれた」
「――――違う」
「貴方は、私を愛しています」
「違う、私はお前を愛せなかった」
「いいえ、愛しています」
「――――私は……」
男は頭がおかしくなりそうだった。
女の言い分は正しい。
だがそれを認める事が出来ない。

認めたら最後、男は完全に歪んでしまうからだ。
「――例え」
女が既に渇ききった口で、喉で声を出す。
「例え、貴方の愛が、生き方が正しくないと、誰かや他でもない貴方自身が断言しても……私だけは、赦します。貴方を愛します」
「――――」
男のナイフを握る手に力が入る。
それは男の意思ではなく、意志によるものだった。
「――ああ、でも」
女が呟いた。
「我が儘を言うのなら、もう少しだけ生きて、貴方と貴方の子どもを――」
愛していたい。
女はそう呟いた。

――これは、昔の話だ。
男と女の、いつの日かの遠い思い出。
ただそれだけの話だ。

バニーバニー

この街はどうにも不可解だ。
霊脈がそうさせているのか、それともまた何か別の原因があるのか。
とにかく、悪霊の類が他と比べて多い。
とはいえ、対処しきれないというわけでもない。
それに大体は放っておいても自然消滅するモノばかり。
いくら自身が神父の身とはいえ、こうして夜の街に繰り出してわざわざ潰して回る必要性はあまり無い。
ここ冬木の街にも管理者はいるのだから。
「……ふむ」
――だが、自宅の近くに沸いて出るモノは放ってはおけない。
何故なら自宅にはアレがいる。
悪霊に魅入られ、病魔に好かれる体質の己の妻が。
悪霊を放っておけば、確実にアレは取り憑かれ簡単に死に至るだろう。
そう断言できるほど、妻は驚く程の霊媒体質だ。
それならば、この街から出れば良い。
日本に来たのも、元々は父親の仕事の関係で一時的に住むつもりだっただけだ。
用が済めばまた引っ越すつもりだったのだが……
『ねぇ、綺礼さん。ここは良い所ね』
アレが気に入ってしまった。
わざわざ己にとっての死地を気にいるとは、何という皮肉だろうか。
しかし、その事を妻に伝える事はしなかった。
伝えたところで、アレはこの地に骨を埋める事を喜ぶだろう。
故に自分は、こうして偶に沸いて出るモノを神のもとに送り返す。

職業柄、間違った事はしていないのだから咎める者も居ない。
「こんな所か……帰るとしよう」
そろそろ日付が変わりそうな時間。
心配性のアレがそろそろ騒ぎ出す頃合いだ。
言峰綺礼は帰路についた。

「ね、ねぇカレン……もう充分でしょう？」
「何を言っているのですかお母さん、あと百枚は撮りましょう」
「もう良い子は寝る時間――」
「夜更かし最高、残念ですねお母さん。あなたの娘は明日まで悪い子なのでまだ寝ません」
もうダメだ。
恥ずかしさのあまり熱が出そうだ。
しかしこんなにも楽しそうに、目をキラキラさせている愛娘の要求に付き合いたいというのも事実。
しかしこれは流石に――
「あ、あのねカレン……お母さん流石にこういうのを着れる年齢じゃない気がするの……」
「何を言うのですか。年齢や性別など些細なモノ、何も問題はないです。それにお母さんは言うほど老けていないですよ。日本では充分に若妻を名乗れる年齢です」
「そ、そうなの？　けど家の中とはいえこれは流石に……本当に服なのこれ？　下着じゃなくて？」
「えぇ、場所によってはそれが正装らしいですよ。主にカジノとか」
娘の言葉に耳を疑う。
そして自分の今着ている服――正確にはカレンがどっからか持ってきた『バニーガール』という服を。
……やはりこの露出度は下着は水着の類ではないのだろうか？

『お母さん、来年は卯年なのでこれを一緒に着て写真撮りましょう』
カレンがそう言って帰ってきた時は、まさかこんな恥ずかしい目に遭うとは思いもしなかった。
娘とペアルックの記念撮影が出来るなんて純粋に思っていた自分がもはや懐かしい。
それにしてもカレンは堂々としている。
同じ格好をしているのに、羞恥心は何処に置いてきたのだろうか。
「……おや、フィルムが――ちょっと買ってくるのでまだ着ててください」
「え、ちょ、カレン!?」
娘は新しいフィルムカメラを買う為に、ウサギの付け耳だけ外して身体を隠すようなコートを羽織って出て行ってしまった。
あんな格好で外に出るなんて、もはや勇者だ。
「……脱ぎたい」
しかしそうすると娘がガッカリする。
しかしこのままだと、そろそろ彼が帰ってくる。
そして見られる、この恥ずかしい格好を。
「……私も何か羽織れば――」
あとは娘が帰ってくるまで、娘の部屋に隠れていよう。
夫は娘から部屋に近付かないように言われて、それを律儀に守っている。
つまり娘の部屋なら安全だ。
そうと決まればと、自室にコートを取りに行くとしよう――
「……あ」
「……」
そして、運悪く、玄関の扉が開いた。
カレンではない。
帰ってきたのは、夫の綺礼さんだった。
互いに見つめ合って十秒。
「あ、あぁぁぁ～……」
私は羞恥心が臨界点に達したのか、変な声を上げながらヘナヘナと

その場に座り込む。
そして腰に力が入らなくなってしまった。
「……持ち上げるぞ」
夫は瞬時に状況を理解したのか、妻を軽々と抱き上げる。
「あ、あ、綺礼さん……これには深い訳が」
「大体は想像できる。言いたいのなら止めはしないが」
「うぅ……」
そのまま大人しく自室に運ばれるのを待った。
「――似合っているぞ」
「――はぅ……」
そんな事もありつつも、言峰家は今年も無事に過ごせた。
来年もどうか、この幸せが続きますように――